NPO 法人
日本･デンマーク
生活研究所【会報】
第 12 号(2014 年 10 月)
発行人　千葉　忠夫

住みよい幸せな国づくり

＊デンマーク生活便り ⑪ ＊

高齢者福祉(2)

理事長　千葉忠夫

現在デンマークの高齢者福祉の一番の担い手は社会保健介護助手（Socail og Sundhedshjælper）と呼ばれる通称ホームヘルパーである。かつてホームヘルパーは７週間の研修を受けて成れたのだが 1990 年以降１年２ヶ月の教育を受けることになった。教育期間が長くなった理由は今後の高齢者は身体的にも精神的にも人間としての質の違う人たちとなるので、その人たちに対処できる素養をヘルパーは持たなければならなくなったことである。また、新しいホームヘルパーの教育に引き続き社会保健介護士（Social og Sundhedes assistant）の教育(１年８ヶ月)がスタートした。これはかつてデンマークにも存在していたが廃止された「準看」と看護師の間くらいの資格で、筋肉注射や多少の医療行為もでき教育終了後は高齢者福祉分野のみならず一般病院、精神病院、精神患者入居(通所)施設等でも勤務することが出来る。

デンマークの高齢者福祉を補っている制度として７５歳以上でホームヘルパーの訪問を受けてなく、デイセンター等にも通所をしてない在宅高齢者を対象に、在宅介護課の職員が年２回訪問し、健康相談、家族関係、日常生活、その他諸々について話し合うという、高齢者福祉の予防対策としても良い制度がある。

更に、各地方自治体は４年に１回地方議員選出時に高齢者委員も選出する。６０歳以上の住民は高齢者委員の選挙権ならびに被選挙権を有する。高齢者委員会は自分が住む町が自分たちに住み良い町となるよう、例えば町中に段差がないバリアフリーにするようになど地方議会に要請する。逆に地方議会は町の高齢者予算、あるいは高齢者施設を検討するに当って必ず高齢者委員会にお伺いを立てなければならない。高齢者委員会の代表は市会議員と共に年２回(内１回は抜き打ち訪問で)町の高齢者施設を監査する。

1998 年までは高齢者福祉は行政が「やってあげる」福祉であったが、一部改正された社会サービス法により「やってあげる」の施しではなく、住民に対するサービスに変わった。要するにこれまでは職員が勤務する施設の入居者誰々さんであったのが現在では高齢者センター（plejecenter）内のユニットの自宅に住む誰々さんのお宅に職員がサービスに行くということである。したがって、デンマークの特別養護老人ホームは無くなり、全ての高齢者は高齢者センター内の４５～６５㎡の１ＬＤＫか２ＤＫの住宅に住んでいる。高齢者センターは自治体により Ældercenter あるいは Lokalcenter とも呼んでいるがその機能は高齢者センターと殆ど変わりなく、各ユニット（４～９のユニット）内に約１０軒の高齢者住宅、そして共同の場としてアクティヴィティセンター、リハビリ、現状維持トレーニングセンター、カフェテリア、キオスク、美容室、フットセラピストの部屋などがある。これらはユニットの住宅に住んでいない在宅の高齢者も利用できるのでデイセンターの役割をしているところもある。

認知症高齢者に対する支援もそれぞれ在宅、高齢者センター入居者を問わず実施されている。ここで一番活躍する職員は認知症コーディネイターと地域高齢精神医療班である。認知症コーディネイターと地域高齢者精神医療班は共に住民（在宅あるいは高齢者センターに居住する高齢者）と家庭医の間にあって家庭医、高齢者センター職員、病院との連携を密にし、認知症高齢者の支援をしている。

最後にデンマークアルツハイマー協会が出している「認知症１０の危険信号」を添付する。

認知症１０の危険信号

デンマーク・アルツハイマー協会

1.記憶力の喪失

約束事や言付けを忘れて後で思い出すことは正常である。

何処へ行こうとしているのか、あるいは先刻誰と話したかを忘れるのは正常ではない。

2.日常の生活力の低下

コーヒーをいれようとして電源を入れるのを忘れることは正常である。

魔法瓶をガス台や電熱器の上に置くことは正常ではない。

3.言葉の問題（会話に問題が生じる）

時に正しい（適切な）言葉を見いだせないことは正常である。

単語を完全に忘れ無意味な言葉で代替することは正常ではない。

4.時間や場所（方向）が分からなくなる

日時を間違えたり新しい場所へ行く道が分からなかったりすることは正常である。

昼夜を覆したり熟知している場所をうろうろしたりすることは正常ではない。

5.判断力の低下

雨が予想されるのに雨具を持たないで出かけることは正常である。

冬であることを忘れ戸外で夏服を着ることは正常ではない。

6.抽象的なことを理解しがたい

格言を理解しがたいことは正常である。

格言を文字通りにとらえることは正常ではない。

7.置き場所を間違える

眼鏡や車のキーを何処に置いたか忘れることは正常である。

アイロンをテレビの上に置いたり焼きブタを茶箪笥の引き出しに入れたりすることは正常ではない。

△▲△★☆★△▲△★☆★△▲△★☆★△▲△

＊日本を憂える⑩＊

副理事長　川島正仁

ギャンブル大国日本

厚生労働省の研究班の調査では、昨年のギャンブル依存症にかかっている人は 536 万人に上るという。実際は、この数字を遥かに超えると思う。

多くはパチンコ、競馬などが原因である。そしてこの秋の臨時国会で IR 推進法案（カジノ法案）が可決される可能性が大きい。何とこの法案を推し進めるのが現役の国会議員約 200 名で驚くことに、安倍首相が特別顧問として名を連ねている。

彼らは「先進国でカジノがないのは日本ぐらいだ！」と言う。それではパチンコはどうなのだ。他の国にはパチンコは存在しない。鳥取大教授は「パチンコなど身近なギャンブルが、全国どこにでもあることが海外よりギャンブル依存症の率が高い原因ではないか」

確かに毎日朝早くから「パチンコショップ」の前に沢山の人が列をなしている。このうえ「カジノ」が出来たらこの国はどうなってしまうのか！

パチンコに夢中になって幼い子供を車に放置して死に至らせる犯罪が頻繁に起きた。私たちは、決してこのような犯罪を許してはならない。他人事ではないのである。

一度「依存症」にかかると何があってもプレイを優先する。負けを取り戻そうと必死になり、周りの人に大変な迷惑をかけてしまう。そして一家心中に至る場合もある。

この国は一見「民主主義国家」のように思えるが、実際はとてもそのレベルではない。もっと一人一人が自覚し、考え、努力して個々の人間性を高める努力をしなければならない。

8.行動様式と感情の変化

哀しい日があったり気分の悪い日があったりすることは正常である。

理由もないのに感情が激しく変化することは正常ではない・

9.性格の変化

視点や姿勢が年とともに変わることは正常である。

性格が異常に変化し急に混乱したり疑い深くなり攻撃的になったりするのは正常ではない。

10.自主性を失う

ある日何もする気力がなくなり、踏ん切りがつかないことは正常である。

絶えず受身型でヒントを与える必要があったり、行動開始に大きな支援を要することは正常ではない。

△▲△★☆★△▲△★☆★△▲△★☆★△▲△

＊ 真の民主主義とは ⑪ ＊

理事(事務局長）前田正志

人間の脳について研究しているある脳外科医によれば、人間には①生きたい、②知りたい、③仲間になりたい、の３つの大きな欲求があるとのことです。そして、つじつまが合わない事や、非対称的な物事に違和感やストレスを感じます。いわゆる美人やイケメンが好まれるのは、顔立ちがバランスよく対照的な作りをしているから脳にとって心地よいのだそうです。人間は他者との間にいろいろな違いがあります。その違いを認識し、「仲良くなる」方向で乗り越えた時に「仲間になりたい」という欲求が満たされます。つまり集団の中で意見の違いを議論を経て皆が納得して同じ方向に向かっていくという民主主義のプロセスは医学的にも人間の脳にとって非常に好ましいシステムといえるのです。

【第１１回の実践】

他者との違いを乗り越え、納得して同じ目標に向かうことが脳にとって良い状態を作り出していることを意識しよう。

第５回研修塾
～Weekend Folkehøjskole in Kyoto～開催

報告　副理事長　茂木俊郎

「女性と若者の社会進出・政治参加～デンマークの青年政治家を迎えて～」をテーマにした第５回研修塾が９月１９日（金）から２泊３日の日程で開催されました。特に２日目の午後は**同志社大学社会福祉学会の協賛**を得て同大学新町キャンパス臨光館の大教室に６０名余の聴衆を迎えてのシンポジウムでした。

１９日（金）関西セミナーハウス修学院きらら山荘に１５時集合。１６時からオリエンテーションに続いて参加者の「他己」紹介。これは研修塾で毎回行っている参加者紹介の方法で、任意にペアを組んだ二人が互いに相手にインタビューして、相手の事を参加者に紹介するというものです。夕食後は懇親会で、それぞれがデンマークや日本の現状、ＮＰＯに寄せる思いを交流し合いました。

２０日（土）９時から茂木が「教育・政治・経済」と題した講義を行いました。池上彰氏の「池上彰の日本の教育がよくわかる本」(PHP 文庫)をメインの資料にして、第一部「教育と経済」で①経済協力開発機構（OECD）加盟国で教育機関への公的支出が国内総生産（GDP）に占める割合は日本が４年連続で最下位であること、②OECD 加盟 34 か国中 31 か国で高校の授業料は無料であること、③日本以外の OECD 加盟国は大学の授業料無料または給付型の奨学金が制度化されていること（今年９月 18 日の信濃毎日新聞社説）などを話し、アンヘル・グリア OECD 事務総長の「目の前に（経済）危機があるからと言って、今日の教育予算を切ることは、明日の日本の成長を切ることになる。」（前掲書）という言葉は、長岡藩参政小林虎三郎の「米 100 俵」の精神と同じであると述べました。第二部「教育と政治」では教育の中立が危うくなっていることを、教育委員会制度の変遷の歴史、中央教育審議会、教育再生実行会議等の関係者の思い込みだけで事実の検証をしない組織が日本の教育の根幹を恣意的に決めてしまう現実を指摘しました。第三部では「日教組と政権」として、日教組と文部（科学）省との不毛な対立が生じた歴史を説明しました。10 時 30 分から川島副理事長が「日本を憂える」という題で、対話形式の講義を行いました。内容については 2 ページの記事を参照してください。

シンポジウム　①基調講演「社会福祉国家への道」（千葉忠夫理事長）講演の最初はパワーポイントを用いてデンマークを象徴する写真を次々と紹介、続いて参加者にとっての幸せとは何かを質問して会場内を回りました。幸せな国は住みやすい国であり、真の民主主義が実現している国であることをデンマークの福祉や教育制度の説明をしながら分かりやすく話してくれました。税金の使い道が象徴的だと思いました。

［税金の使い道］
行政管理費――――――――――――13．0％
警察・防衛費――――――――――――　5．0％
教育費――――――――――――――14．0％
保健・医療費――――――――――――　14．5％
文化・余暇・環境関係費――――――　3．5％
国民年金・休養手当・教育援助金
・住宅援助金等－44．6％
企業促進・運輸・通信費――――――　5．4％

続いてシーナ　W.　ソオンセンさんから②「女性の政治参加の意義」という提言がありました。シーナさんは 19 歳で保守党に入党、立候補を勧められ、20 歳で市会議員に当選、1期4年の任期を終えて現在は大学院で政治学を専攻しています。現在 25 歳。

Signe Welander Sørensen

シーナさんが政治を志した理由は、1、十代のいとこが犯罪に関与し、それに対する市当局の社会復帰対策に不満を感じたこと、2、近頃の若者は怠惰で無責任だというメディアに対する反発、の二つだそうです。「政治を志すのは、自分の考えを社会に反映させるにはどうしたら良いかと学校で学んだことの実践に過ぎず特別なことではない。当選時の市議の平均年齢は 54 歳、次に若い人が 35 歳だったので、女性というより若い世代の代表として発言したかった。」

「日本の女性議員の比率が 10％と聞いて驚いている。デンマークでは 1908 年、地方議会の、1915 年に国政の参政権を女性が得た。当初 4.5％だった女性議員の比率が 70 年代の女性の社会進出を経て今は 40％ぐらい。男性議員とは別の視点を持つことに意味がある。」「民主主義は国民・民衆が主導するもの。政治家は民衆の意見を無視してはならない。国民は選挙を大切に。」とも話してくれました。

「デンマークから全てコピーする必要はないが正しいと思ったことは取り入れ、変えていくべきだ。」「民主主義を教育の場で教えることが大切だ。（デンマークでは 13 歳くらいで政治に関心を持つようになる。）」この 2 つがシーナさんから日本人への提言であったと思います。

最後にラッセ　H．ピーターセンさん（19 歳）から③「若者の政治参加」という提言がありました。ラッセさんは学校でただ政治社会を学んだり生徒会活動をしたりするだけでは不満に思い、17 歳の時、社民党に入党し青年部執行委員などを務め、先輩から市議への立候補を勧められ、昨年の選挙で当選しました。在学中の

Lasse Hougaard Pedersen　今年１月１日から市会議員となり、６月に高校を卒業しました。

ラッセさんが政治に関心を抱いたのは、やはり社会の不条理に納得できなかったからです。「18 歳から 25 歳の若者が成人の 20%を占めるのに議員は５％しかいない。シーナさんの時から４年経って若者の立候補は倍増したが地方議会の平均年齢は 48 歳、75%は男性、（在職で議員活動ができるので）公務員が多い。地方や身近な所から民主主義を徹底させ、県政・国政へと広めていくつもりだ。」「当選して余暇活動小委員会に所属したことは若者のためになると喜んでいる。Nord Fyn 市は母子・子供対策に重点を置いていたので、青少年にも力を入れて欲しいと主張、同年代の声の反映に努力している。これは大切なことだ。また小中学校の上級生の学校横断的な集会を組織し、彼らの声を市会に反映させる活動をしている。子供たちも市政に関心を持つようになった。」ラッセさんが社会の不条理を感じたもう一つの大きな出来事がありました。「私が８歳の時に両親が離婚し、母は同性婚をした。妹が小学校三年生の時にそのことで同級の男子たちから苛めを受けるようになった。母と私は何回も学校に訴え善処を求めたが校長は自業自得でしょうと言った。私はそれが許せなかった。苛め問題は母が保護者達と話し合い解決したが、私は中学二年生（八年生）で生徒会副会長に選ばれ学校理事会のメンバーになった機会に、校長の態度を改めさせた。現在政治活動に行き詰まりを感じると常に妹の事を思い出し社会の不公正を無くそうとしている。」「君が若いから、経験が足りないから（そんなことを主張するの）だ、という残念な声もあるが、議論の中身は年齢と関係ないはずだ。」「私の主張が通らなくても、年長者も興味はあるはずだ。だから私は主張する。」

「年齢や性別から出発する政治は民主主義とは言えない。若者が政治に参加することは重要だ。ただ政治は分かりにくいので身近に感じさせる努力が必要だ。」力強く、情熱的に語るラッセさんに参加者も強い刺激を受けたようでした。

お二人に対し十数件の質疑応答が行われました。「日本での討議経験で一番変な国と感じたこと」という質問に、シーナさんは「供託金制度は民主主義ではない。戦後最初の投票率が最高で下がり続けていること、女性議員の比率の低さ」、ラッセさんは「選挙権が 20 歳からというのは随分遅い。」と答えていました。

グループワーク　その夜研修塾の参加者は深夜までNPOの今後について話し合いました。

21日（日）　午前中グループワークの発表を受けて、参加している理事・監事と今後のNPO法人　日本・デンマーク生活研究所（以下「本会」と略称します。）の活動、活性化のための方針について討論しました。

スペースもありませんので主なことがらだけ挙げると①ノアフュンフォルケホイスコーレの卒業生名簿を作り各種事業への理解・協力を訴える。②全国を幾つかのブロックに分け、研究会・講演会・お茶会などを開き、本会についての理解を広める。 デンマークに関心を抱いている人は多いので、経験を話す、留学・研修のアドバイスをする、帰国報告会を開くなどの活動を企画・実行する。 各ブロックの活動は会報紙上で交流し合う。③デンマークに関係ある企業、団体などをリストアップし、前記活動などに協力を得るようにする。④本会の組織固めも必要。②の活動をするためにも、会員に誰がいるのかが分からない現状は困る。⑤将来的にはデンマーク関係の学会、大学、研究者との提携を図る。等々です。会員の皆さんには詳細を別紙で同封します。

当NPO関連の講演会記録

[9月15日]東京「若者と女性の社会参画」 25 名
[9月23日]佐賀「若者と女性の社会参画」 40 名
講師は９月 20 日の研修塾シンポジウムと同じでした。

編集後記　研修塾の報告を参加できなかった会員のためになるべく詳しく伝えたいと考えたら、いつもの事務局からのお知らせが無くなってしまった。☆そもそもは９月の研修塾の報告を本号に載せようというのが無謀だったか。☆発行が若干遅れたことはご容赦ください。☆素敵な詩集をいただいた。「いまの生きかたを変えれば／未来は　かわる／／支え合って　咲くことは／生きのこる知恵だ」（「植物との対話　大澤澄男詩集・大空社」）☆多くの国民が予感する悲惨な未来を変えるために、この国の今を変えなければならない。真の民主主義の国へと。（茂木俊郎記）

発行所
〒292－0801
千葉県木更津市請西４－６－９
Tel：0438-36-3565
お問合せTEL:090-9827-9262
茂木俊郎
NPO法人ホームページ
http://www.djsli.com
メールマガジンの申し込みはホームページからお願いします。